

## 研究ノート

# 総合的な学習の時間に関する一考察 ～ 授業の質の向上に向けて ～

坂 本 徹

北里大学獣医学部

## 1 はじめに

教職課程において「総合的な学習の時間の指導法」の授業を行う中で気になり始めたことがある。それは、学習指導要領<sup>1</sup>やその解説<sup>2</sup>に記された本来の在り方と現場の実態の乖離である。学習指導要領に沿って行われた「総合的な学習の時間の指導法」の授業で得た知識をもって教員免許を手にした学生たちは、教員という職業に就くや否や、現場の実態に大きな驚きと戸惑いを覚えるに違いない。実際に高校教育に携わり、総合的な学習の時間を担当した経験から実態を知っているだけに、どうしたものかと悩むのである。いくら本質とはいえ、理想的な知識を伝授するだけでは不十分である。実態を踏まえた実践的な力をつけさせるための授業改善が必要と考える。

## 2 アンケート調査の実施

前述の危惧は明確な根拠に基づくものではないため、授業改善に向かうには客観性に欠ける。そこで、総合的な学習（探究）の時間の実態を知るため、アンケート調査を実施することにした。アンケートはGoogleフォームを利用して行い、北里大学の学生だけではなく、私が顧問を務める学生団体のメンバーを通して、7大学110人の学生の協力を得ることができた。（図1）

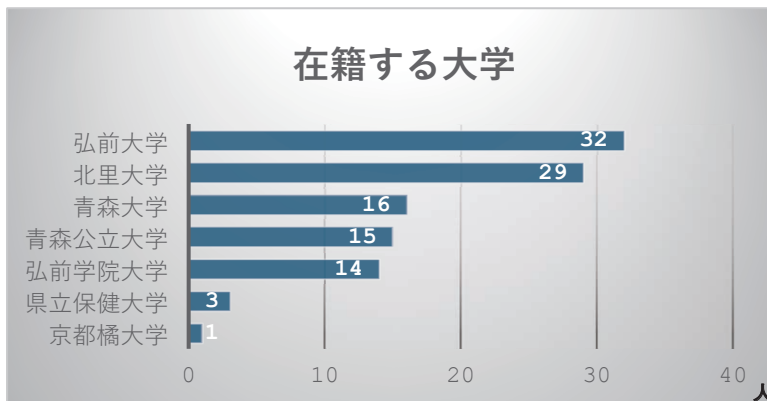


図1 調査対象の状況（在籍する大学）

出身県は48%が青森県で、52%が北海道から九州までの23都道府県となっている。高校の設置区分は77%が国公立、23%が私立であり、進学校や中堅校の比率が高い。(図2)

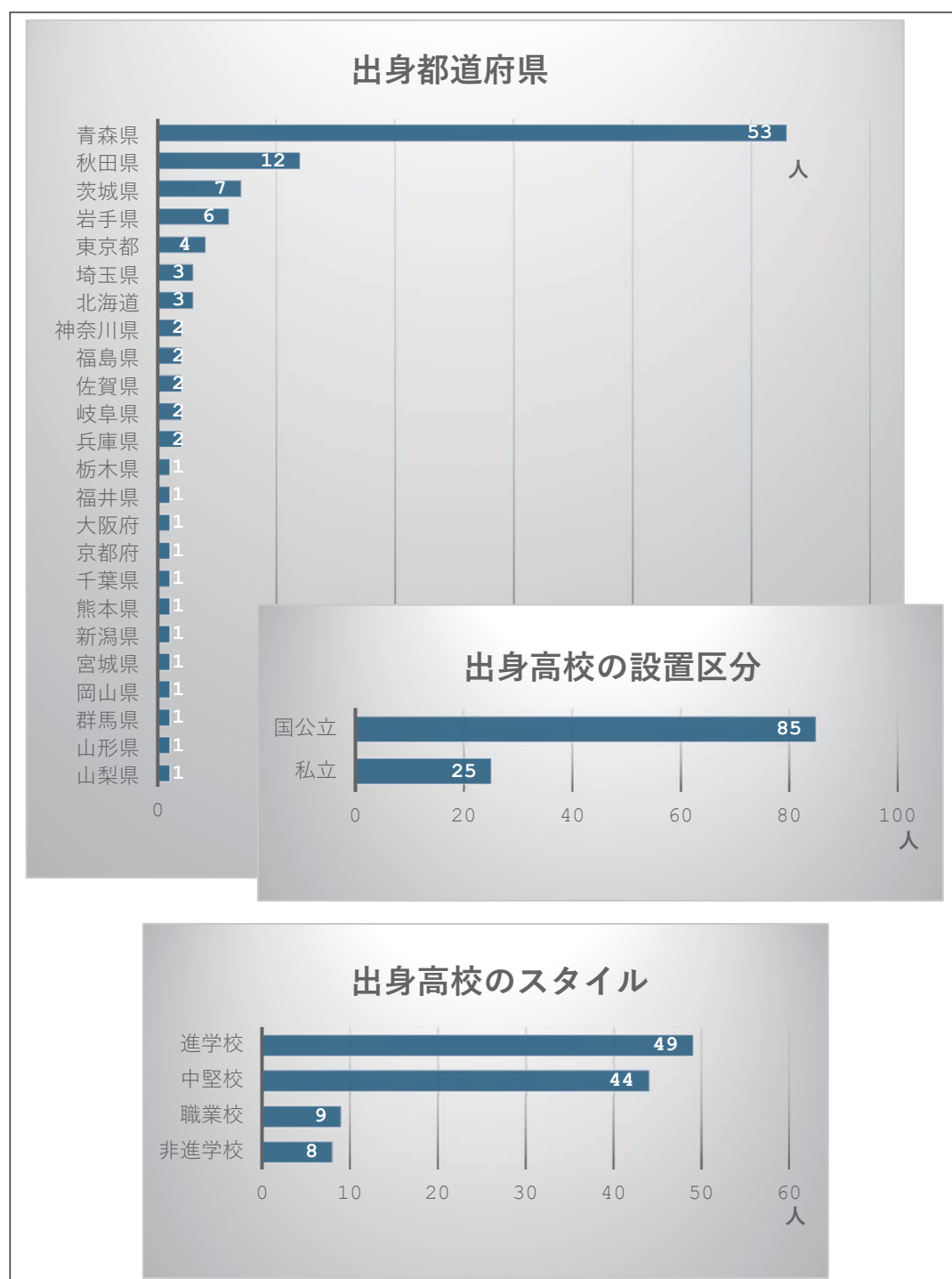


図2 調査対象の状況（出身都道府県など）

### 3 総合的な学習（探究）の時間の実施状況

総合的な学習（探究）の時間の実施方法については、多くが1週間に1回定期的に行っているが、まとめ取りや不規則な実施も見られる。（図3）

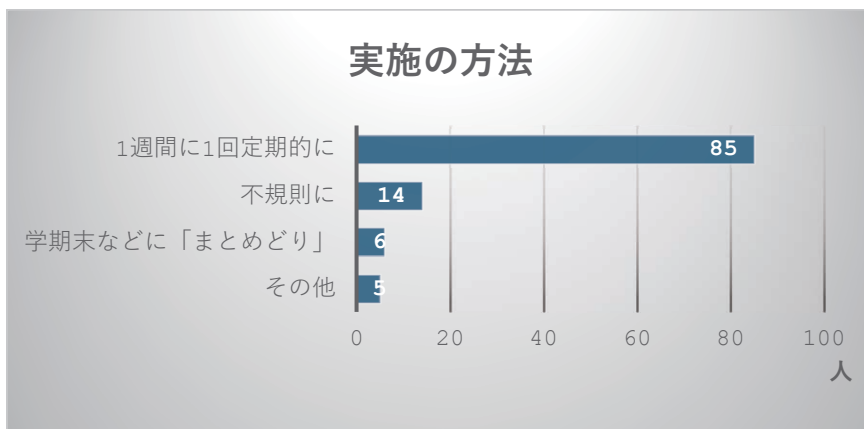


図3 実施状況（実施の方法）

#### ①課題の設定

中学校においては「先生が課題を与えて」が飛び抜けて多く、高校においても「先生が」が最も多くなっている。「課題は設定しなかった」との回答があるのも気になる。

本来、総合や探究は生徒が課題を見出すところから始まるものであり、学習指導要領解説<sup>2</sup>にも「日常生活や社会に目を向けたときに湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ」と記されている。しかるに学校現場ではそうっていないのが現実である。（図4）

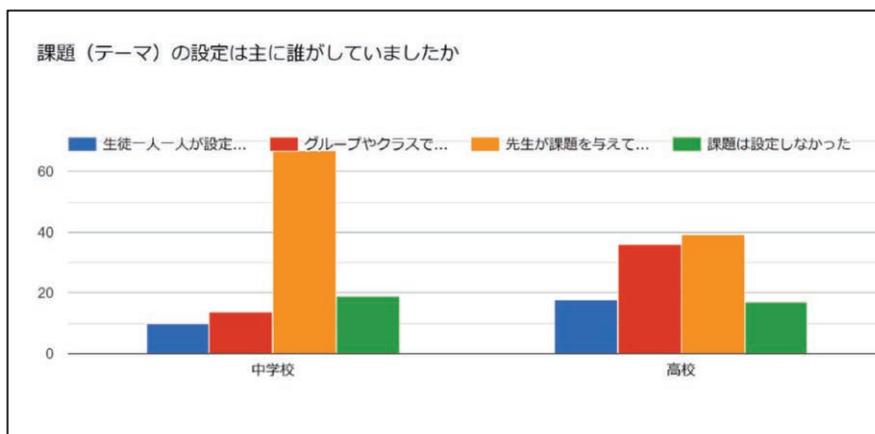


図4 実施状況（課題の設定）

## ②時間のかけ方

中学校、高校ともに「じっくり時間をかけて」は少数派であり、その傾向は中学校のほうが顕著である。高校の方が比較的時間をかけて実施しているのが伺えるが、いずれにしても十分な時間が配分されていない現状を見て取ることができる。(図5)

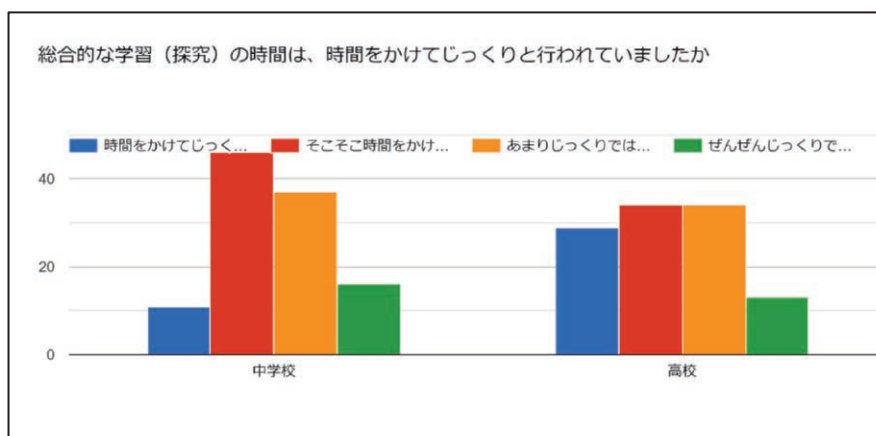


図5 実施状況（時間のかけ方）

## ③地域との連携・協力

中学校、高校ともに外部の人材を招くことはあまり多くない。また、学校の外に出かけることは更に少ない。グラフを見る限り、学校の中だけで活動することが多いのがわかる。インターネットを活用すれば様々な情報を得ることができ、居ながらにして調べ学習が可能であることは確かだ。しかしながら、様々な事柄を知ることはできても、「様々な人の考えに会う」ことは期待できない。(図6、7)

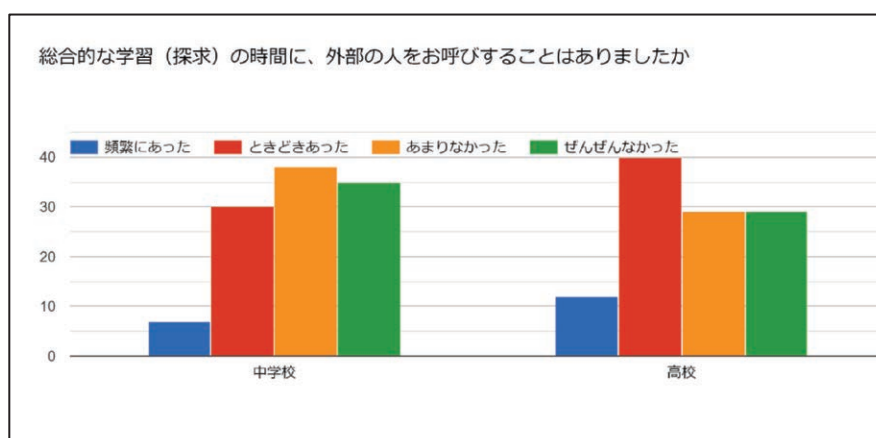


図6 実施状況（外部人材の活用）

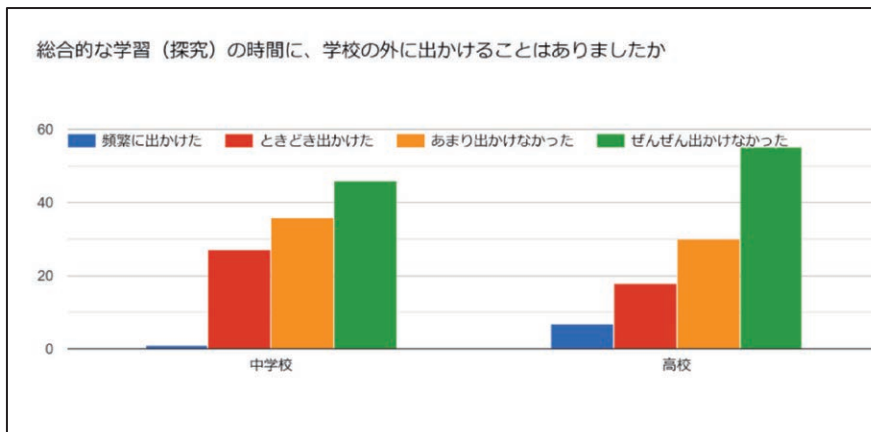


図7 実施状況（学校外学習の実施）

#### ④趣旨とは異なる運用の有無

中学校、高校ともに、総合的な学習（探究）の時間が本来の趣旨とは異なる運用をされるケースが多くあり、「かなりの頻度」「ほとんどが」も少なくない。「回数は少ないが」を入れると、実に8割近い学校で本来の趣旨とは異なる運用がなされている。その内訳は、一般教科の授業の補填やテスト勉強、個人の進路のための調べ学習など多岐にわたる。学校現場で総合的な学習（探究）の時間がいかに軽んじられているかが伺える。（図8）

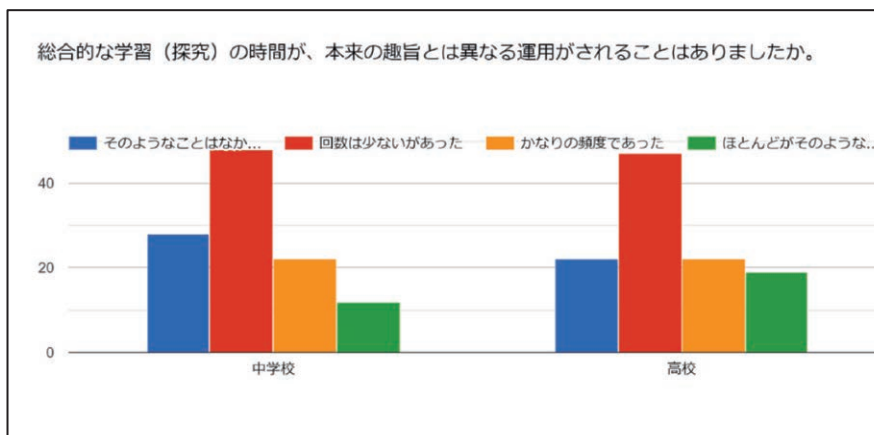


図8 実施状況（趣旨とは異なる運用の有無）

#### 【授業におけるエピソード】

北里大学獣医学部における授業の中で、これらのグラフを基にした話し合いをさせた。学生たちの生の声からも、本来の趣旨や目的に則して充実した授業を実践している学校もあれば、あまり熱心ではない学校もあることが分かった。

中には「僕の高校では総合や探究の時間は無かった」と主張する学生が何人かいて驚か

された。周りの学生たちも「そんなことはあり得ないだろう」と騒ぎ出したが、本人は「絶対に無かった」と主張する。高校の時の時間割表を持っていると言うので調べさせてみると、2年次は「総合数学」、3年次には「数Ⅲ探究」という表示があった。総合的な学習（探究）の時間が数学に化けていたのだ。そういうことだったのかと本人も含めて、学生たちは事の真相を知るに至った。（図9）

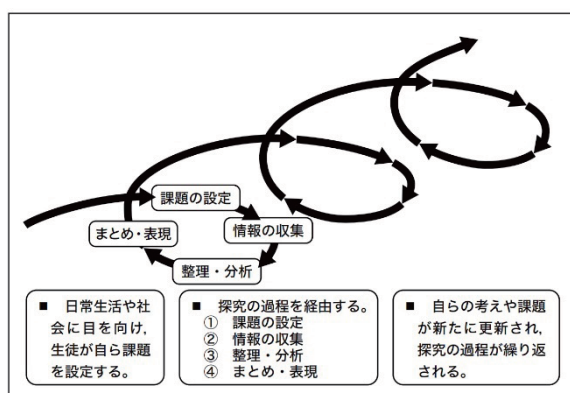


図9 探究における生徒の学習の姿  
（出典：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説  
総合的な探究の時間編 P.12

## 4 生徒の取組状況について

### ①趣旨や目的の理解度

中学校・高校ともに、総合的な学習（探究）の時間の趣旨や目的をよく理解している生徒は少なく、十分な理解のないままに授業が実施されている様子が伺える。中学校に比べて高校の理解度の方がやや高くなっている。（図10）

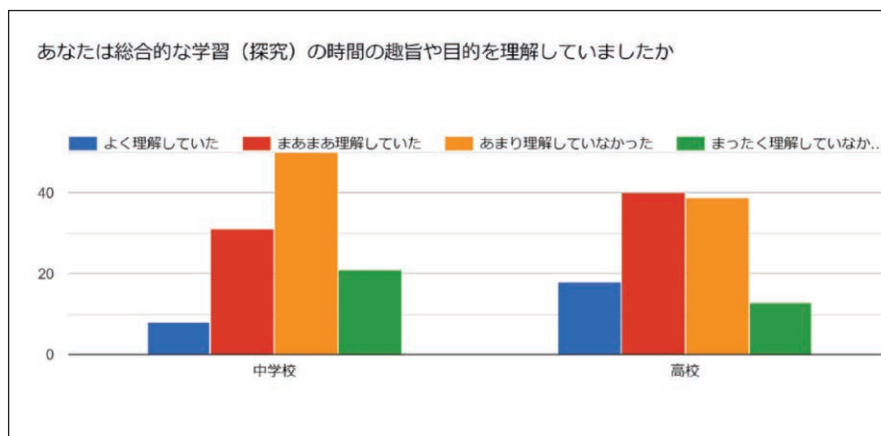


図10 生徒の取組状況（趣旨や目的の理解度）

## ②自身の取組姿勢

中学校では「あまり熱心ではなかった」が多く、高校では「まあまあ熱心に取り組んだ」が多い。どちらも「とても熱心」が一定数いる一方、「まったく熱心ではなかった」も存在する。

中学校よりも高校の方が熱心な比率が高くなっている。グラフの形がよく似ていることから、①の理解度と相関関係がありそうである。(図11)

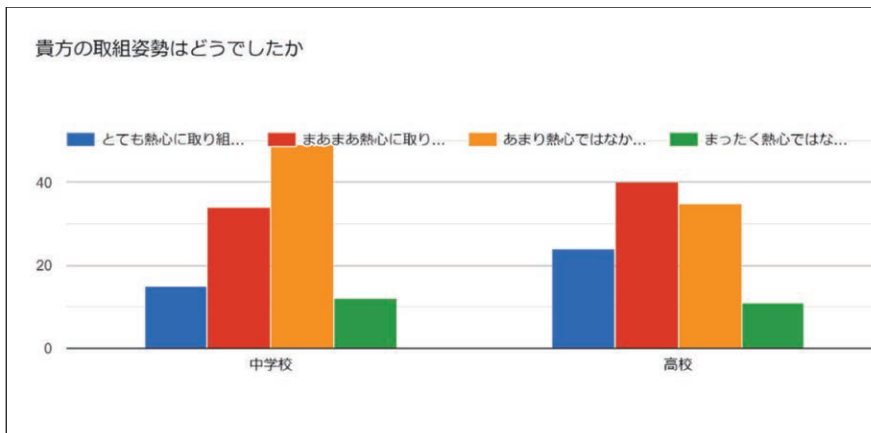


図11 生徒の取組状況（自身の取組姿勢）

## ③楽しかったかどうか

中学校・高校ともに「楽しかった」が6割、「楽しくなかった」が4割といったところだろうか。この結果を「楽しかったが多い」と見るか、「楽しくなかったが4割もいる」と見るか。人によって評価が分かれるかもしれないが、私は後者の立場に立って考えたい。(図12)

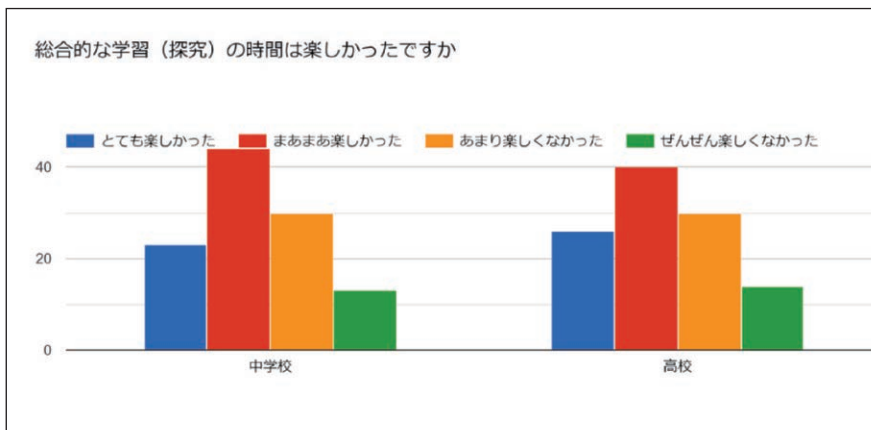


図12 生徒の取組状況（楽しかったかどうか）

#### ④有益と思うか

中学校・高校ともに8割近い生徒が「有益」と感じている。趣旨や目的の理解度や取組姿勢、あるいは楽しいかどうかとの相関は分からないが、多くの者が自分にとって有益と感じているようである。ただし、ここでも有益とっていない者が一定数存在することを忘れてはなるまい。(図13)

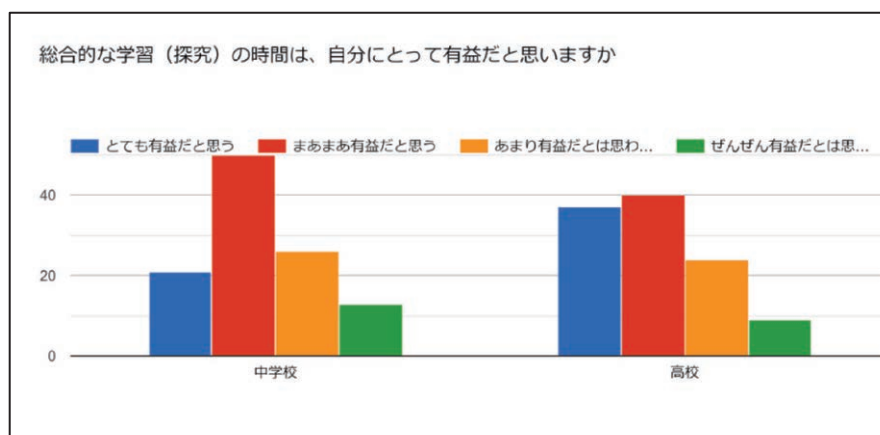


図13 生徒の取組状況（有益と思うか）

### 5 教師の取組状況について

#### ①趣旨や目的についての説明

総合的な学習（探究）の時間の開始にあたって、趣旨や目的についての説明があったかという問いに対して、中学校では「軽く説明」が最も多く、高校では「詳しく説明」が最も多くなっている。中学校・高校ともに「説明は無かった」も一定数見られる。4①の生徒の理解度との相関を調べる必要があると思う。(図14)

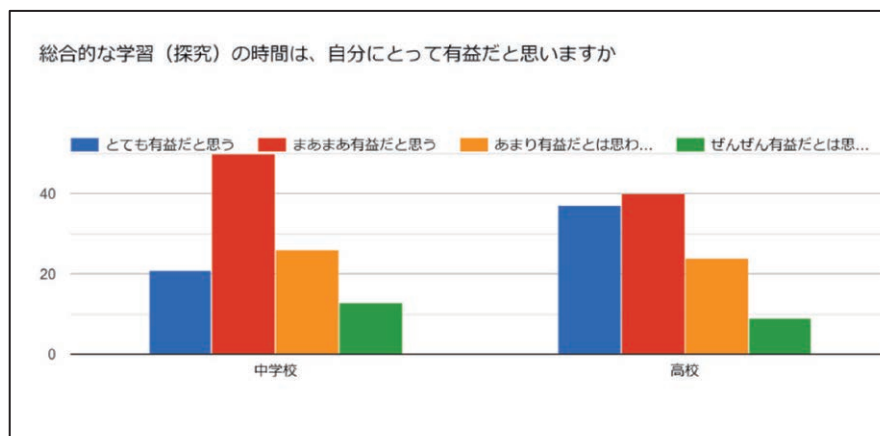


図14 生徒の取組状況（趣旨や目的についての説明）



## ②重要視していたかどうか

教師が総合的な学習（探究）の時間をどの程度重視していたと思うかを尋ねてみた。客観的なものではなく生徒としてどう感じたかであるが、中学校・高校ともに「あまり重視していなかった」が最も多くなっている。前述の、本来の趣旨とは異なる運用されるケースは、このような教師の姿勢が影響しているであろうことは想像に難くない。（図15）

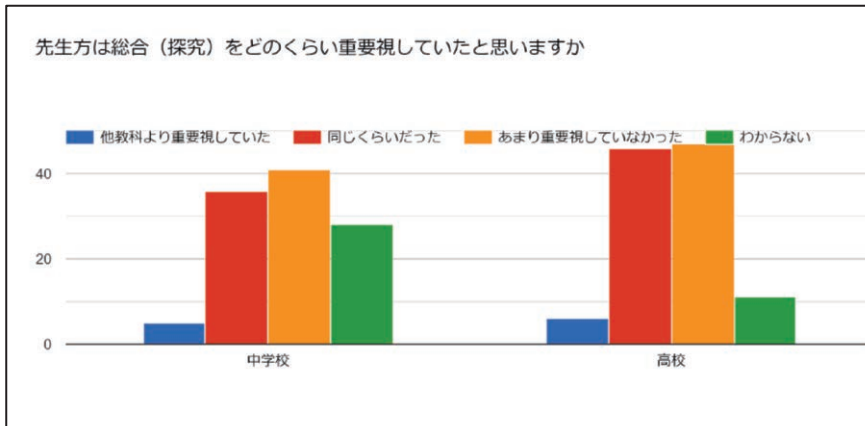


図15 教師の取組状況（重要視していたかどうか）

## ③教師の取組姿勢

この質問も生徒としてどう感じたかであるが、中学校・高校ともに「まあまあ熱心」が最も多い。「とても熱心」を加えると中学校・高校とも70%ほどになる。あまり重要視していない割には、熱心に（多くはまあまあであるが）取り組んでいる様子が伺える。教師の真面目さの表れだろうか。しかしながら、熱心ではない教師も少なからず存在している。（図16）

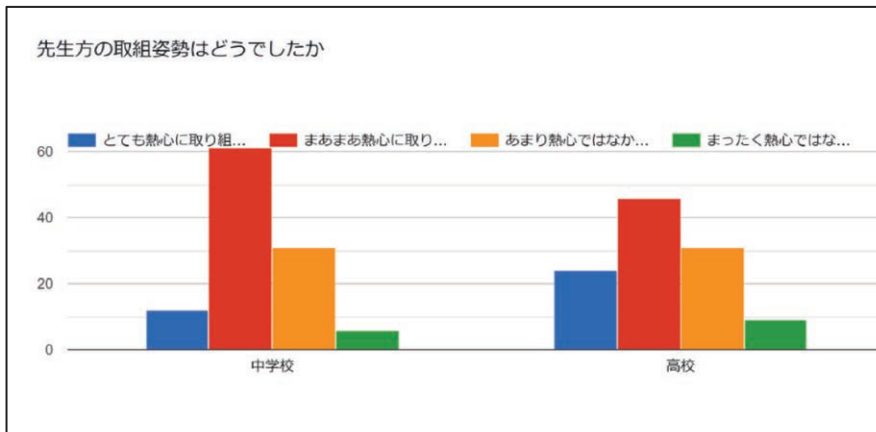


図16 教師の取組状況（教師の取組姿勢）

## 6「探究」ということについて

高校において「学習」から「探究」に切り替わったのは2022年度からであることから、現在の大学1年生と2年生においては高校の途中からの導入であり、3年生と4年生は「探究」を経験していない。

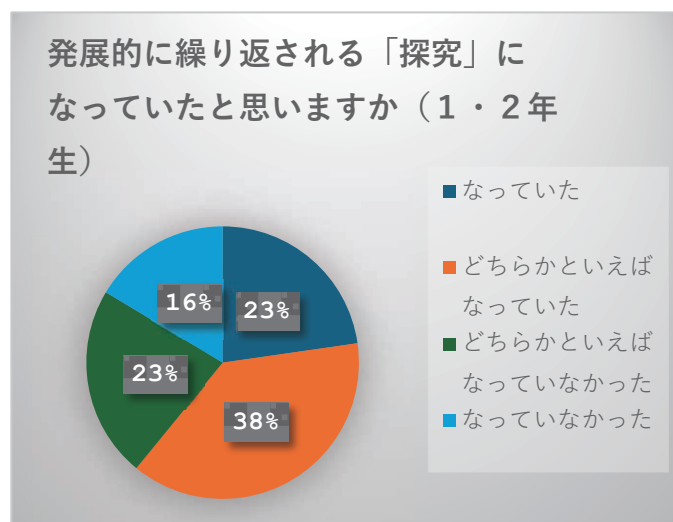


図17 「探究」に関すること①

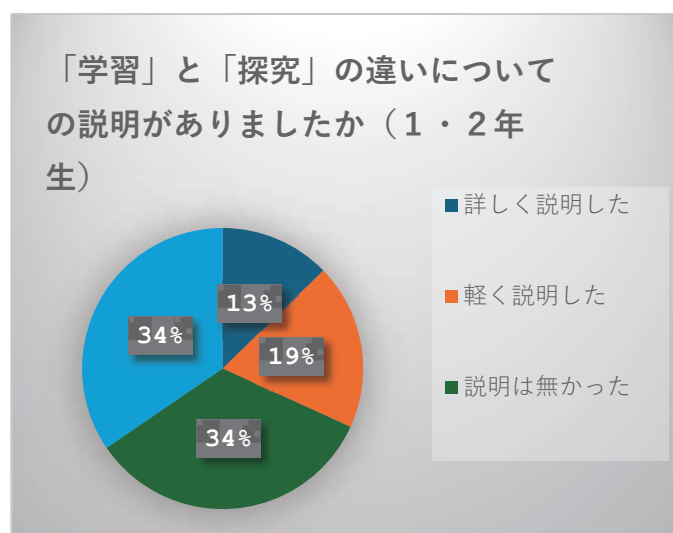


図18 「探究」に関すること②

総合的な探探の時間が、発展的に繰り返されるいわゆる「探究」になっていたかを尋ねたところ、23%が「なっていた」との回答であり、「どちらかといえば」を加えると61%となる。一方、「なっていなかった」「どちらかといえば」の合計は39%となり、3分の1強の高校では「探究」を実現できていないことが伺える。導入からの年月が短いことを考慮しても、生徒たちにこのような感覚を与えてしまっていることは決して良いことではない。（図17）

小学校や中学校とは異なり、高校では「探究」という概念が導入されているが、その違いについて詳しい説明があったのは13%に過ぎず、軽く説明したを加えても32%に過ぎない。探究の意味を理解していない高校生の活動が「探究」になるのはなかなか困難なことであろう。（図18）

## 7 むすびに

一昨年の4月、県立K高校から全教員を対象に「探究」の在り方について指導して欲しいとの依頼があった。学習指導要領とその解説は与えられているわけであるが、それだけで充実した授業を実施するのは難しいのかもしれない。現場の教員の多くは「総合的な学習の時間の指導法」を履修しておらず、探究についての理解も不十分のようである。

アンケート調査の結果から、総合的な学習（探究）の時間の実施状況、生徒の取組状況、教師の取組状況のアウトラインが見えてきた。この度の分析は単純集計によるものであり、それら相互の因果関係までは明らかにできていないが、かなり強い相関関係があることが予想される。

今後、クロス集計を施してより詳細な分析を行い、実態を明らかにしたいと思う。また、中学校よりも高校の方が総じて取組状況が良いことが伺えるが、このことについても分析を進めたい。その上で、学校現場の実態を踏まえた「総合的な学習の時間の指導法」の授業を目指していきたいと思う。

### <参考文献、参考資料>

- 1 文部科学省（2019年）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』
- 2 文部科学省（2019年）『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）総合的な探究の時間編』